

白老地域のアイヌ工芸について －松永八重子資料を中心とした検討－

Traditional Crafts of Shiraoi Region
－ From the Collections and Creations of Yaeko Matsunaga －

八幡巴絵 (YAHATA Tomoe)

国立アイヌ民族博物館 学芸主査 (Senior Fellow, National Ainu Museum)

要旨

北海道白老町に2018年まで開館した一般財団法人アイヌ民族博物館¹⁾ (以下、旧アイヌ博) では、工芸を専門として行う職員が勤務し、職員らが製作した民具の一部は資料番号が付与され、収蔵庫にて保管され、儀礼などの伝承活動や博物館の展示に使用した。2024年現在、それらの資料は2020年に開館した国立アイヌ民族博物館の収蔵品となっている。本稿では、その前身となる白老民俗資料館 (以下、資料館)、旧アイヌ博における工芸技術の系統、参考とした原資料、複製事業に関することについて、元職員らへの聞き取り調査を行い明らかにする。

本稿では、ポロトコタンと呼ばれた資料館、旧アイヌ博に1978年から2002年に勤務した松永八重子 (まつなが・やえこ) に焦点をあてる。検討手法は、松永の同僚や松永が主宰したサークル「チタラペ」に所属している人たちを対象とした聞き取り調査を行い、松永の経歴や工芸技術の系統について整理をした。さらに国立アイヌ民族博物館収蔵の、松永が製作した資料や松永旧蔵の資料のなかで、衣服とござを対象とし、松永が指導を受け習得した技術や、それが松永からどのように伝承されてきたかを明らかにした。それらの情報から、ポロトコタンを起点とし白老町に広がった工芸活動のなかで、松永が関与した衣服、ござの製作技術について考察し、今後の松永が製作した資料に関する課題を述べるものである。

キーワード：白老地域、アイヌ、ござ、ポロトコタン、国立アイヌ民族博物館、松永八重子

Abstract

The Ainu Museum which operated in Shiraoi, Hokkaido until 2018, employed staff who specialized in traditional crafts. Some of the ethnic materials produced by staff were assigned a serial number, stored in the museum's collection storage facility, and used in exhibitions and cultural activities such as rituals. Today, in 2024, these objects form part of the collection of the National Ainu Museum, which opened in 2020. In this paper, the author interviewed former employees of the Shiraoi Folk Museum (the predecessor of the Ainu Museum) and the Ainu Museum in order to clarify lineages of craft techniques, materials used as reference sources, and the reproduction projects carried out at these institutions.

The paper focuses on the works of Yaeko Matsunaga, who worked at the former Ainu Museum, also known as Porotokotan, from 1978 to 2002. The research method used in order to investigate Matsunaga's background and the lineage of her craft techniques is based upon interviews with Matsunaga's colleagues and members of the craft circle "Citarpe", which she presided over. The author also conducted a survey of the objects in the collection of the National Ainu Museum, including clothing and mats that were made by Matsunaga and formerly in her possession to determine the techniques that were passed on under her guidance. Based on this information, the paper discusses the techniques used to make clothes and mats by Matsunaga and those around her that originated in Porotokotan and spread into Shiraoi town. The paper also describes issues that need to be addressed in future research into the materials created by Matsunaga.

Keywords : Shiraoi, Ainu, *goza* (mats), Porotokotan, National Ainu Museum, Yaeko Matsunaga

1. はじめに

これまで、アイヌ文化の研究は、「伝統」に着目される傾向がみられた。このため観光地におけるアイヌ文化の継承を具体的に明らかにした研究は少ない。北海道内では、いくつかアイヌ文化を紹介する観光地として有名になった地域があり、それぞれの時期でどのように文化が継承されてきたのか、基礎的な事実をおさえていくことが不可欠である。このような問題意識に基づき、本稿では白老出身であり、資料館、旧アイヌ博職員として工芸分野で活躍していた松永八重子の衣服とごさを対象とし、得た情報を整理することによって、松永が指導を受け習得した技術や、それが松永からどのように伝承されてきたかを明らかにした明らかにする。

北海道白老町のポロト湖畔では、一般財団法人アイヌ民族博物館（以下、旧アイヌ博）が2018年3月末まで営業を行っていた。旧アイヌ博は、1965年オープンした「ポロトコタン」の名称を引き継ぎ、「ポロトコタン」や「白老ポロトコタン」の愛称で親しまれ、博物館の展示のみならず、伝承公開事業として、古式舞踊の定時公演や伝統的儀礼が公開されていた。しかし白老町内では、旧アイヌ博設立の1984年まで、白老のアイヌ民族の工芸に関する直接的な記録が少ないため、手仕事に関する一連の情報がまとまっていない。そのため工芸技術の系統の全容や製作物に関する情報などは、現在まで断片的にしか伝わっておらず、職員の「口伝え」に頼るのみとなっている。

旧アイヌ博では資料館、旧アイヌ博の元職員が製作したモノは、収蔵資料として資料番号が付与され登録が行われた²⁾。旧アイヌ博の収蔵資料は、国立アイヌ民族博物館（以下、現アイヌ博）に引き継がれ展示事業や調査研究事業等で活用されている。そのため民具を「生かす」には、工芸の記録をまとめることは急務であると考え、筆者は2018年から旧アイヌ博の手工芸の技術や、製作時に参考とした原資料、さらに民具収集などについて、元職員らに対して聞き取り調査を行ってきた。その中で、女性の手工芸分野では、主要な人物として松永八重子、工藤栄子、山崎シマ子などの名前が挙がった。

松永八重子（1941-2022）は、白老民俗資料館時代の

1978年から勤務し、2002年に旧アイヌ博を退職後、白老町内で工芸サークルを主宰し、女性の手仕事を中心とした技術伝承や製作した資料の成果品展などを行い、白老町内における人材育成やアイヌ文化の普及啓発活動に寄与した人物である（写真1）。松永の没後、製作した資料の一部は自宅にて保管されていた。2023年春に遺族から「八重子が製作した資料を、国立アイヌ民族博物館で保管し、後世に残して欲しい」と申出を受け、松永旧蔵の資料35点が新たに収蔵資料となった。

ポロトコタンにおいて継承されてきた工芸が、「口伝え」頼みとなっている現在の伝承活動は、今後元職員の高齢化に伴う町外への転出や養護施設への入所などの理由から、指導者の情報が後進へ伝わらず、伝承活動の先細りが懸念される。これは白老地域のアイヌ文化伝承の情報の損失につながってしまう。年を追うごとに聞き取り調査の実施が難しくなっている情勢を考慮した上で、ひとつでも多くの情報を集め、欠けている情報を補うことが不可欠である。情報を補うために聞き取り調査や資料調査を継続し、そこで得た個人の功績から、資料館、旧アイヌ博、そしてそのフィールドを包括した「白老ポロトコタン」で行われた工芸について考察し、ひいては白老地域全体のアイヌ工芸を明らかにしたい。その情報を白老地域のみならず、他地域の物質文化の実態解明に役立てたい。

このような背景から、本稿では工芸に関する情報が空白となる1975年から1984年のうち、1978年から2002年に工芸担当職員であった松永に焦点をあて、聞き取り調査と資料調査（文献、音声、民具資料）から、資料館・旧アイヌ博の勤務時代から退職後のサークル時代までの活動を明らかにし、松永の製作の特徴と背景にある資料館、旧アイヌ博の工芸技術の系統を考察する。



写真1 松永八重子（1941-2022）
（白老町教育委員会蔵 2009年頃撮影）

2. 調査方法

本調査方法は、聞き取り調査と資料調査(文献、音声、民具資料)の2つを採用する。

2.1. 聞き取り調査

松永八重子が製作したものに関する情報は、現アイヌ博に収蔵されている資料に付帯する情報、古式舞踊公演の記録写真となる。それらをもとに、松永と同時期に旧アイヌ博に勤務経験のあった職員や松永が主宰したサークル「チタラベ」に所属したことのある人物、松永と交流があった人物に対し、聞き取り調査を実施した。なお、聞き取り調査で得た情報の公開については、個人情報やプライバシーの取り扱いについて各個人と協議を行い、公開許諾を得た内容のみ記載することとする。

上掲の人物に対し、下記の設問をインタビュー項目として設定し、聞き取り調査を行い、関連する情報をまとめた。

- ・松永は、いつからアイヌ関連資料の製作をはじめたのか。
- ・松永が指導を受けた人物や期間。またどのような民具の製作について指導を受けたか。
- ・松永が指導した人物。
- ・松永は旧アイヌ博在籍時や退職後にどのようなものを製作していたか。
- ・アイヌ文化伝承活動における松永のエピソード。
- ・松永が旧アイヌ博を退職した後に主宰したサークルの活動内容。

なお、話者が「ポロトコタン」と説明した箇所は、時期を明確に記すために、1965年～1984年3月までの事項は「資料館」と示し、1984年4月から2018年までの事項は「旧アイヌ博」と書き分ける。「ポロトコタン」は、資料館と旧アイヌ博での概念を説明する際に用いる。

2.2. 資料調査

資料調査は、現アイヌ博の収蔵資料を中心に、文献、音声、民具資料を対象とした。

文献調査では、松永の製作した民具と資料館、旧アイ

表1 調査協力者一覧(敬称略、順不同)

氏名	続柄、所属、勤務期間	現在	備考(聞き取り日時など)
松永陽子	松永八重子 長女	－	2023年7月、2024年4月聞き取り
山崎シマ子	資料館、旧アイヌ博工芸班 (1988-1996)	サークル「テケカラベ」主宰	2022～2024年6月聞き取り
山丸和幸	資料館、旧アイヌ博職員(1982-1990)、 常務理事(1992-1998)、専務理事(1998- 1999)、理事長(1999-2001)。旧アイヌ博館 長兼務(1995-2001)	一般社団法人白老アイヌ協会 理事長	2024年3月、9月聞き取り
岡田路明	資料館、旧アイヌ博 学芸課 (1977-1991)	一般社団法人白老アイヌ協会 事務局長	2024年7月23日聞き取り
野本正博	旧アイヌ博伝承課、学芸課(1997-2012)、 常務理事(2012-2018)	公益財団法人アイヌ民族文化 財団民族共生象徴空間運営本 部 副本部長	2024年7月28日聞き取り
清水綾子	サークル「チタラベ」所属		2023年7月聞き取り
平野敦史	仙台藩元陣屋資料館 学芸員		2024年9月20日聞き取り
森洋輔	しらおいイオル事務所「チキサニ」学芸員		2022年1月、2024年9月

ヌ博の工芸を関連づけた記録はない。そのため、間接的にでも触れているものも対象とし、旧アイヌ博の刊行物や、書類を調査した。白老民俗資料館、白老観光コンサルタント株式会社³⁾、財団法人白老民族文化伝承保存財団⁴⁾、財団法人アイヌ民族博物館、一般財団法人アイヌ民族博物館の名義で発行された刊行物を対象に調査した。しかし、松永の工芸関連の直接的な記録は非常に少なかった⁵⁾。

音声資料については、現アイヌ博の収蔵資料のなかで、松永への聞き取りの記録を対象としたが存在しなかったため、本稿では取り扱わない。

民具資料については、松永が製作または所有したことが判明している資料を対象に、旧アイヌ博から現アイヌ博へ移管された資料調査を行い、松永の製作した資料の特徴について検討した。松永の製作した民具とともに資料カード、管理用 Excel データが現アイヌ博に存在したため、民具の情報をまとめた一覧を付表で示す。

以下に、聞き取り、資料調査を実施した結果をまとめる。

3. 松永八重子について―聞き取り調査を中心に―

3.1. 資料館勤務以前の経歴 (1978年以前)

松永八重子は、1941年、母・松永たけ (1912-1996)⁶⁾の長女として北海道白老町に生まれた。1978年に資料館に勤務する以前の経歴について、松永の長女・松永陽子 (1967-) へ質問したが、「母・八重子の若い頃の話は、あまり聞いたことがない」と話していた。これは山崎シマ子、岡田路明、野本正博も同様であった。そのため、資料館以前の経歴は現時点でよくわかっていない。2023年春に松永の自宅を訪れた際、室内にはアイヌ文化以外のさまざまなハンドメイド雑貨が飾られていた。陽子は「母は編み物などをよくやっていた」と話した。松永が元来、手仕事が好きであったことがうかがえた。

3.2. 資料館、旧アイヌ博勤務時代 (1978～2002)

松永は1978年に白老民俗資料館を運営する財団法人白老民族文化伝承保存財団の定期職員⁷⁾として勤務をはじめ、同時期に白老民族芸能保存会に加入した⁸⁾。入社時は、資料館の学芸課工芸班に所属した。同時期に勤務した岡田路明によると、結婚前に和裁を習得していたようで、入社時からアイヌ女性の手仕事に関する技術を覚えることが早く、手先がとても器用であっ

たことが印象に残っているとのことであった。入社以降、野本ヨシエ⁹⁾や織田ステノ¹⁰⁾が製作した衣服やゴザなどを参考にして、ルウンペと呼ばれる木綿の衣服や模様入りのござを製作した。その後、織田ステノが白老へ招聘された1977年から1982年の5月から10月の期間に、ござ編み、樹皮衣、手甲、脚絆などの製作指導を直接受けた。

1988年から1996年に勤務した山崎シマ子によると、松永、山崎、工藤栄子¹¹⁾の3人は、工芸だけではなく、古式舞踊公演にも参加しており、踊りの公演の合間に工芸を行い、年度毎に製作した資料を博物館の学芸課に持っていき、その一部は収蔵品として登録されたという。財団法人アイヌ民族博物館が1996年に刊行した『二十年の歩み』によると、「財団でが、設立と同時にアイヌ文化の伝承・保存事業の一環として、伝承課職員により民具を中心とするアイヌ民族資料の製作を日常業務に取り入れており、製作品の多くは資料として博物館に収蔵している。博物館では、これらの製作品を一次資料として保存している」とある (財団法人アイヌ民族博物館1996: 46)。山崎の話では、松永、山崎、工藤の3名は、工芸する時間を技術伝承の機会ととらえ、製作するものが年度単位で重複しないように、それぞれ違うものを作っていたという。例えば、松永はござ編み、山崎は衣服製作、工藤はアットウシ織というように、アットウシ織、ござ編み (模様無し / 有り)、サラニャ (編み袋)、エムシアツ (刀掛帯) などを交代で製作していた。その背景に、運営側が松永、工藤、山崎に多くの種類の民具を製作できる人物になってほしいことと、工芸チセ¹²⁾で職員がそれぞれの民具製作している様子を「みせる」ことで、来館者により多様なアイヌ文化を知ってほしいという意図があったと考えられる。

松永は、特にござ編みに非常に高い興味関心を示していたようである。出張や外出の移動中、よく車窓からガマが自生している場所を探していたことをいう証言を、山崎シマ子や松永陽子、岡田路明が語っていた。松永は、常に良質なガマを求め、儀礼の際に使用のござ、チセ内を装飾する大型のござ、囲炉裏まわりで使用する無地のござを積極的に製作していた。

松永は、旧アイヌ博在職中となる1995年に白老町文化奨励賞を受賞した。その後、定年を迎えた2002年3月に旧アイヌ博を退職した。

3.3. 旧アイヌ博退職後 (2002～2022)

退職後、松永は2004年に北海道観光連盟観光振興功

労賞を受けた¹³⁾。2005～2007年の期間、5月から10月末までの繁忙期は、ボランティアとして後進の育成にあたった¹⁴⁾。

2007年5月、松永八重子、清水綾子、吉田フサ子らを中心として、サークル「チタラペ¹⁵⁾」を結成した。サークルでは「織りや編みの技術を伝承するだけではなく、材料の採集や処理・加工などの流れを通して、カムイからいただいたものへの感謝の気持ちを大切にしていきたい」との思いのもと、織物や編み物を実践してきた(写真2)。

2009年に、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構¹⁶⁾より平成21年度アイヌ文化奨励賞(個人)を受賞した(公益財団法人アイヌ民族文化財団2018:44)。2013年には白老町指定無形民俗文化財伝統文化継承者¹⁷⁾の認定を受けた。継承区分は、「工芸:ゴザ編みや縫製や刺繍など伝統的技術の伝承」、「芸能:踊りやムックリなど伝統的芸能の伝承」である。

晩年は、体調を崩すことが多く、メンバーの協力を得つつ、精力的にアイヌ文化普及活動を行っていたが、2022年7月に永眠した。

松永の没後、サークルのメンバーの清水綾子や吉田フサ子を中心となり、活動を継続している。2022年11月に一般社団法人白老モシリは、松永を追悼し、松永がこれまで製作した民具をしらおいイオル事務所チキサニにおいて展示した。ルウンペ、チタラペ(模様入りござ)、松永が使用したござ編み機など計10点を披露した。



写真2 ござ編みをする松永八重子(2015年頃撮影)
(しらおいイオル事務所チキサニ蔵)

4. 松永八重子資料の紹介

2004年8月現在、松永が現役時に製作したことが判明している資料は、下記で収蔵されている。

- ①国立アイヌ民族博物館¹⁸⁾(北海道白老町)
- ②公益財団法人アイヌ民族文化財団(札幌市)
- ③個人(白老町ほか)

本稿では、資料の来歴を明確にするため、項目を分けて資料を紹介する。製作した資料の一覧は付表を参照いただきたい。

4.1. 国立アイヌ民族博物館所蔵資料

国立アイヌ民族博物館所蔵資料は、財団法人アイヌ民族博物館の所蔵資料を引き継いだものと、国立アイヌ民族博物館の展示や調査研究事業等に供するため、文化庁の委託経費で令和5年度に購入した資料がある。

(1) 財団法人アイヌ民族博物館旧蔵資料

旧アイヌ博では、学芸課職員として勤務した岡田、山崎、野本らに対する聞き取り調査で、工芸職員の製作した資料は年度毎に、事業報告書に記載すべく、完成品を学芸課にて預かり、資料番号を付与したのちに、博物館収蔵庫にて保管された。松永が製作した資料は15点である。

松永が製作した資料は、退職後に従事していたボランティア活動の期間中に2点を製作し、計17点に増えた。

その後、松永は白老町内の伝承活動に主軸を置くようになったため、2007年から旧アイヌ博が閉館する2018年まで、松永の製作した資料の点数は増えていない。この期間に、苫小牧美術愛好会の遠藤忠志氏作が松永八重子をモデルとして描いた絵が1点寄贈された。この絵は、松永がボロトコタンでムックリ(口琴)を演奏する様子のため、本稿では付表にのみ掲載することとする。

(2) 国立アイヌ民族博物館令和5年度購入資料

現アイヌ博では、2023年4月に、松永八重子の長女・陽子より申出を受けた資料35点を文化庁委託経費にて購入した。

これらの資料は、松永が製作し所有してきたもので、白老町内の仙台藩元陣屋資料館やしらおいイオル事務所チキサニにて、サークルの成果品として活用されていた。没後、資料保管は松永陽子が、展示会などの渉外対応はサークルメンバーの清水綾子と吉田フサ子らが中心に行った。2022年11月にイオル事務所チキサニで追悼展示を実施した後、「八重ちゃんの資料はもうこれ以上増えることはない。ずっと自宅に保管し

ているより、国立アイヌ民族博物館で残していても
raitaitoと考えて、現アイヌ博へ買取申出をした」と
松永陽子、清水綾子からの話があった。

松永陽子が保管していたルウンベ（資料番号 R5-
01001、R5-01002、R5-01003）とござ編み機（資料番号
R5-01033、R5-01033）は松永が現役時に製作したもの
の一部で、退職する際に旧アイヌ博から贈られたもの
と考えられる¹⁹⁾。

4.2. 公益財団法人アイヌ民族文化財団（事務局）資料

当該財団の札幌事務局で2000年に購入したござが1
点収蔵されている。『財団法人アイヌ文化振興・研究
推進機構収蔵品目録 1 1997.7-2000.3』には資料写真が
掲載されており、「平成11年度工芸品制作」にて入手し
たとあるが、製作年などは不明である（財団法人アイ
ヌ文化振興・研究推進機構2000：67、71）。おそらく、
1999年に行われた普及啓発事業の備品として購入され
たのではないかと推定する。

幅92cm、長さ382cmあるこのござは、（公財）アイヌ
民族文化財団のアイヌ文化フェスティバル等の会場内
で、壇上を装飾するために使用されている。



写真3 松永八重子製作のござ（1999年に収蔵）
（出典：『財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構収蔵品目録 1
1997.7-2000.3』p 67）

4.3. 個人所蔵

個人所蔵の資料は、松永陽子が所蔵しているマタン
プシ（鉢巻）やムックリ、サークル活動時に製作した
ござなどがある。ござは、長さ、幅が60cm以内の大き
さで、メンバーが製作し松永が保管したものと考えら
れる。

また岡田路明、山崎シマ子からは「職員が製作した
ものを博物館のミュージアムショップで販売してい
て、松永の製作したものも過去に販売されていた」と
話があったことから、来館者が松永の製作した民具を
購入し、現在も保管している可能性がある。そのため
現時点で個人所蔵の概要を把握するのは困難である。
引き続き、松永の製作した資料の所在調査を実施する
予定である。

5. 調査結果

以上から、松永が製作した衣服とござについての調
査結果をもとにそれぞれ考察する。

5.1. 衣服について

（1）聞き取り調査の結果

聞き取り調査を行った際、山崎、岡田、野本から得
られた、松永の衣服製作に関する情報は下記の通りで
ある。

「（略）これは（筆者付記：写真4、5に写ってい
る松永が着用しているルウンベを指す）どちらも
八重ちゃんが自分でつくった。この時期（筆者付
記：平成10年頃）は、自分で着用する伝統的衣服
や装身具は、自身で製作するよう努めていた。だ
から何枚も縫ったよ（略）。わたしらのときは、同
じ模様で何枚も作っている。その模様で慣れてい
るから。」（2024年6月の山崎シマ子への聞き取り
にて、筆者が写真4、5について尋ねた際の回答）

「八重ちゃんは、下河ヤエ²⁰⁾さん、久保紀子²¹⁾さ
んたちに縫い方を指導していたと思う」（2024年
6月の山崎シマ子への聞き取りにて）

「平成9年頃に自分は勤務しはじめた。自分の
着物や手甲、脚絆は近藤ノリ子²²⁾さんに製作して
もらった。（略）八重ちゃんやシマ子さんたち工芸
職員は、自分で賄っていた。」（2024年7月の野本
正博への聞き取りにて）

「八重ちゃんが誰から着物づくりを教わったか
はわからない。ただそのときには近藤ノリ子さん
が工芸チセにいたから、もしかして近藤さんから
作り方を教わったのかもしれない。」（2024年7月
の岡田路明への聞き取りにて）

（2）資料調査の結果と考察

上記の情報をもとに、松永の製作した衣服の特徴を
分析する。松永旧蔵の衣服は、令和5年度購入資料の
衣服3点（写真6、写真7、写真8）と半纏1点がある。
衣服は一般的にルウンベと呼ばれるものである。

ルウンベとはアイヌ民族の木綿製の衣服で、白老を

含めた胆振地方や渡島地方で広く着用されている。ルウンペは、木綿の古裂(ふるぎれ)をつなぎ合わせて、その上に、絹、サラサ、メリンス、絹のなかでも日本刺繍のあるもの、木綿などの色物の古裂を細く切り、これを切伏²³⁾している、きわめて手の込んだ衣服である(財団法人白老民族文化伝承保存財団1987:78)。資料館、旧アイヌ博では古式舞踊の公演や伝統儀礼に参加する際に職員が着用した。アイヌの衣服の部位名称については、図1の「アイヌ衣服解説図」(中谷1991:172)、和服の部位名称については図2を参照いただきたい(滝沢1999:71)。

松永が製作のルウンペは、和服に見られる前身頃に衿と身八ツ口が作られており、着物本体に模様を構成する切伏の布はミシンで縫われているため、模様が直線的になっていることが特徴である。その布の上に市販のレース糸(太)を使いチェーンステッチを施して完成している。ポロトコタンで製作されるルウンペの素材は、木綿または化学繊維のいずれかを選択していた²⁴⁾。写真6、写真7の素材は木綿、写真8は化学繊維である。さらにルウンペに施されている模様の構成は写真7と写真8が同じである。

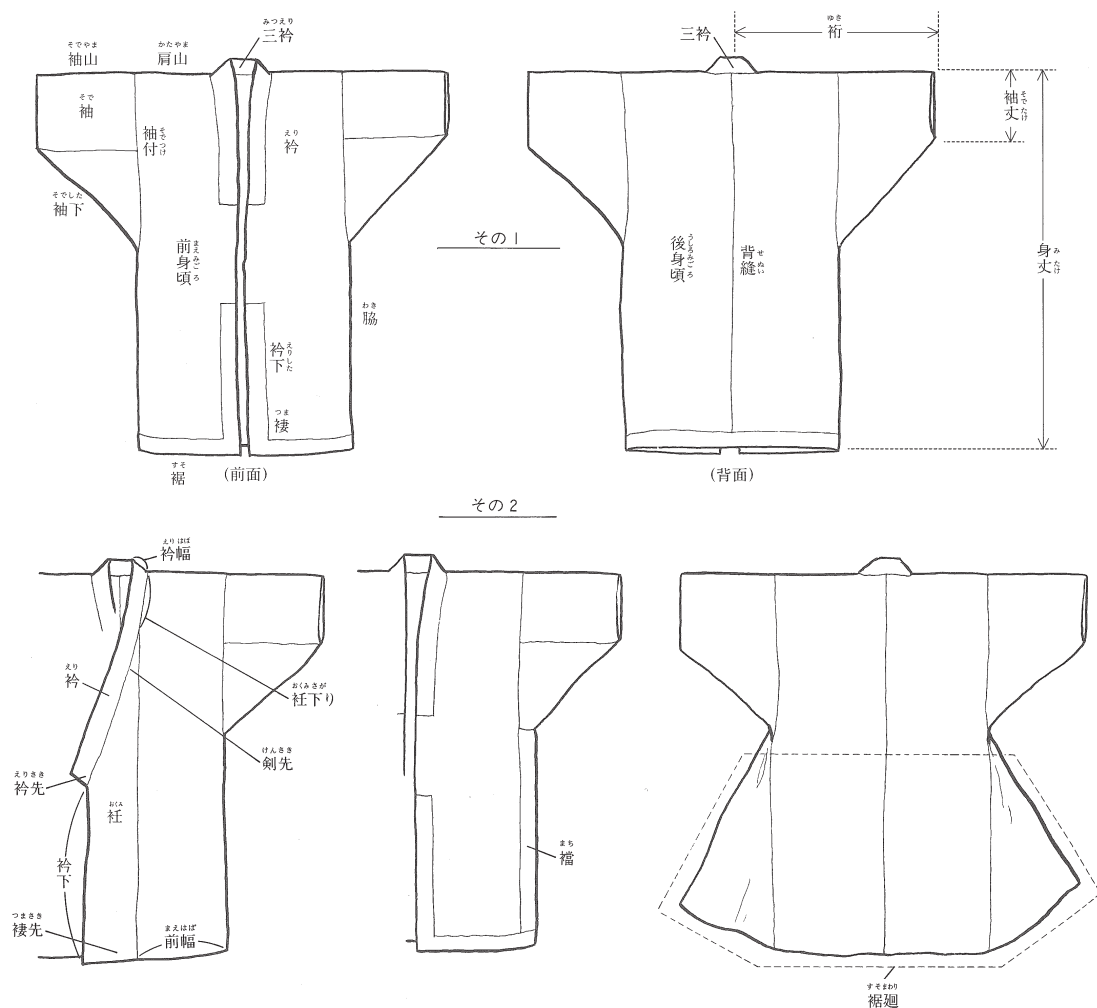


図1 アイヌ衣服解説図
(出典:「アイヌのきもの」『ひとものこころ』第3期第5巻 p172)

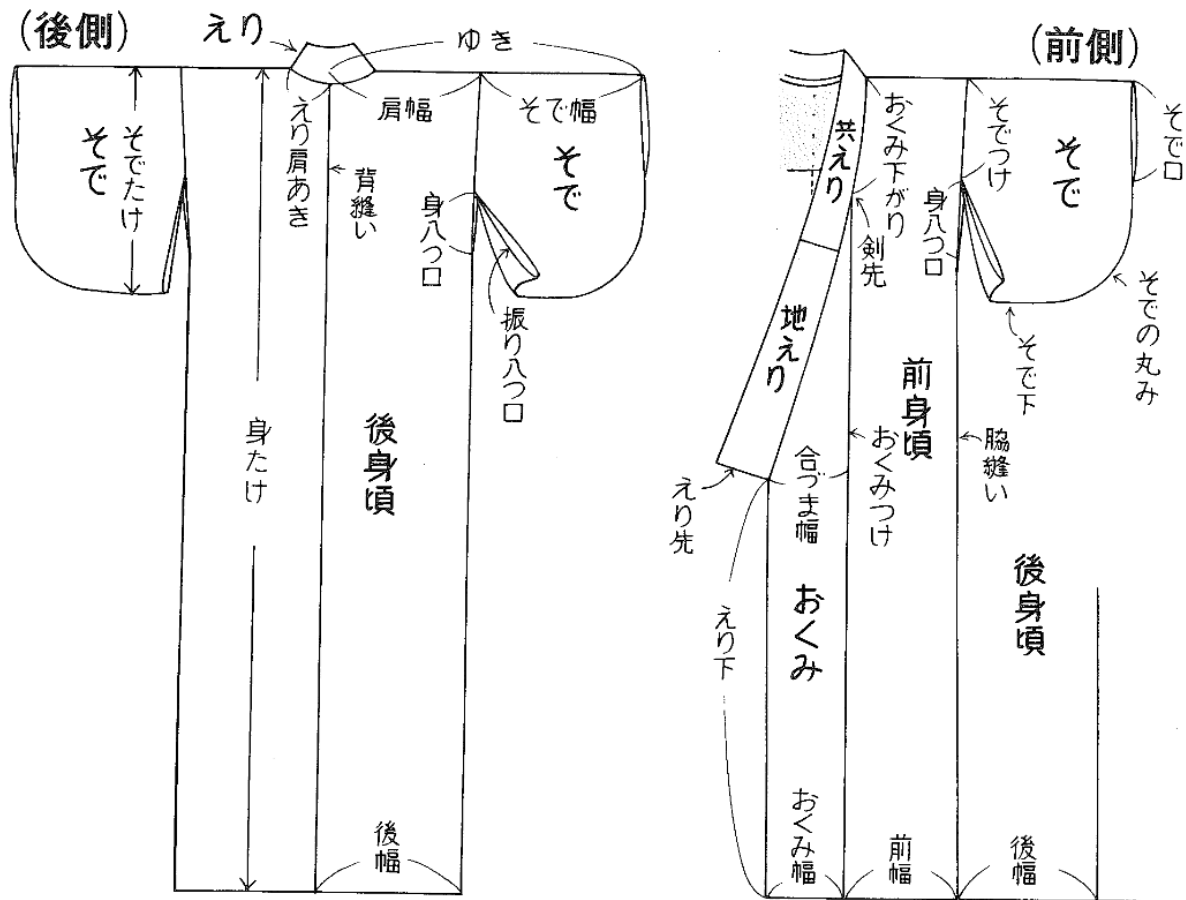


図2 和服の部位名称
(出典：滝沢ヒロ子『新しい和裁全書』p71)

白老地域のルウンペは、1984年以降、多数の観光客を受け入れる過程のなかで、製作者が木綿から化学繊維に素材を変更した(八幡2024:18)。白老民俗資料館からアイヌ民族博物館へと名称を変更した1984年頃に、白老という地域性を考慮しつつ、かつ一体感を演出していることを目的とし、衣装をユニフォーム化したルウンペが作られた。1984年前後は職員数が増加したことに伴い、和裁の要素を取り入れた本体に、白老地域のアイヌ模様が簡素化されたルウンペが大量生産された。このとき職員が参考とした資料は、1980年代に近藤ノリ子を中心となって製作した衽と身八ツ口があるルウンペである(写真9)。近藤が製作したルウンペは木綿であったが、1984年までに安価であった化学繊維に素材を変更し、この流れは1995年まで続いた。1996年頃から出張公演では木綿製のルウンペを着用するようになり、「ルウンペを伝統的な様式に戻す」時期(八幡2024:19)となった。

この時期に記録された写真4、5を見てみると、写真4は1998年1月17日に国立劇場で行われた創作浄瑠

璃「ひなのひとふし、ひなの遊びⅡ-菅江真澄の旅と日記より」の記録である²⁵⁾。ここでは写真6のルウンペを着用していることがわかる。写真5は、2004年3月14日に皇居で行われた平成16年度「国際民俗芸能フェスティバル」の記録である。松永は2002年に退職していたが、この公演への演者が少なかったために一時的に出演したと考えられる。ここでは写真7のルウンペを着用している。さらに被写体となった人物は、写真4、5いずれもみな木綿のルウンペを着用している。

岡田、山崎、松永陽子の聞き取りから、松永は白老のアイヌ民族の伝統衣服のルウンペを含め、資料館に入社する1978年以前はアイヌ民族の女性の手仕事をしていたことがなかったと話があった。その上で2つの事項について整理する。

1つめは、松永の衣服製作について、指導者が現時点で不明であることだ。同時期に勤務していた近藤ノリ子の指導を受けた可能性があることもわかった。2つめは、写真で着用された衣服は、いずれも旧アイヌ博勤務時に着用されていたことから、松永は入社した

1978年から、写真4が撮影された1998年までにはルウンペを製作できたことがわかった。このことから入社以前はアイヌ民族の女性の手仕事をしたことがなかった松永が、入社以降に技術習得ができ、その製作した民具が博物館に残っていたという事実から、資料館、旧アイヌ博はアイヌ文化伝承の実践の場となり、人材育成という大きな役割を担っていたことがわかった。

以下、上記で分析した情報をもとに考察する。

松永の勤務期間は、旧アイヌ博ではルウンペの素材が木綿から化学繊維へ変更し、さらに化学繊維から木綿に変更した時期と重なる。さらに聞き取りで、同じ模様のルウンペを複数枚つくったとあったことから、松永は同じ模様で素材が違うルウンペを複数製作し、所有していたと考えられる。そして松永が製作したルウンペの特徴は、旧アイヌ博で製作された和裁の形態を本体とし、その上に白老地域のアイヌ模様を簡素化した切伏の上に刺繍されたルウンペ(写真9)と模様が類似している。近藤が製作したルウンペよりも切伏や刺繍が多いことから、松永は旧アイヌ博で「組織として製作されたルウンペ」の影響を色濃く継承した上で、模様や刺繍を増やしたルウンペを製作したと推測する。

写真記録と聞き取りから、ルウンペは、写真8(製作時期不明)、写真6(～1998年)、写真7(～2004年)の順に製作し、いずれも松永が旧アイヌ博勤務時に完成し、出張公演等で着用したと推定する。これらのルウンペは、今後白老におけるルウンペの製作、着用形態の変遷や、観光地における衣服の活用などを検討する資料となる。なお、衣服製作における技術の系統は現時点で不明であるが、近藤の影響が考えられることが指摘された。このことを踏まえた上で今後継続して資料調査を行う必要がある。



写真4 出張公演の様子

創作浄瑠璃「ひなのひとふし、ひなの遊びⅡー菅江真澄の旅と日記より」(1998年) 国立劇場(東京都)(国立アイヌ民族博物館蔵)

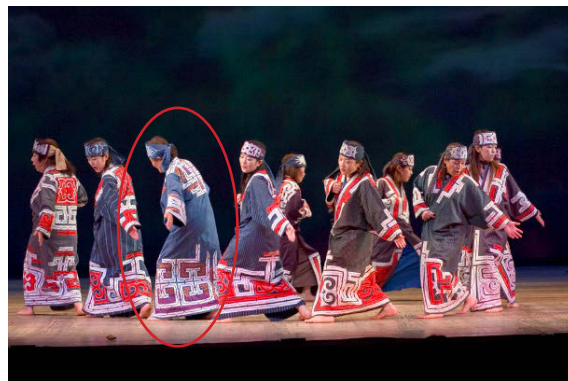


写真5 出張公演の様子

平成16年度「国際民俗芸能フェスティバル」(2004年)
皇居(東京都)(国立アイヌ民族博物館蔵)



写真6 写真4で松永が着用したルウンペ R5-01001
(国立アイヌ民族博物館蔵)



写真7 写真5で松永が着用したルウンペ R5-01002
(国立アイヌ民族博物館蔵)



写真8 化学繊維製のルウンペ R5-01003
(国立アイヌ民族博物館蔵)

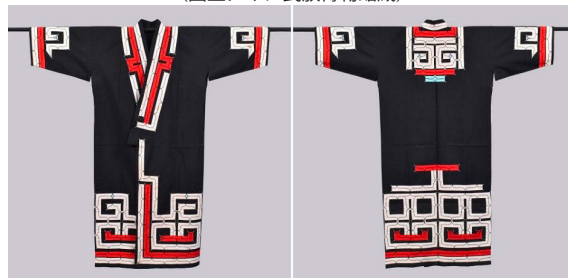


写真9 近藤ノリ子が製作したルウンペ 00245
(国立アイヌ民族博物館蔵)

5.2. ござ類について

(1) 聞き取り調査の結果

聞き取り調査を行った際、山崎、岡田、野本らから、松永のござ製作に関する情報が下記の通り集まった。

「自分は1988(昭和63)年にポロトで働きはじめた。5月頃だったかな。工芸(筆者付記:班)に配属された。そのとき工芸班は、伝承課ではなくて学芸課だった。そして工芸班は、工芸チセってところで働いていた。私がいったときには、野本ヨシエさん、松永八重ちゃん、工藤榮子さんが先に働いていた。ヨシエさんはそのときはもう踊れなくて、ござ編みとか女の手仕事をやっていた。(略)ヨシエさんは、見て覚えてね、というタイプだった。八重ちゃんから聞いたのだけれど、ござの編みははじめだけはヨシエさんに習って、文様は織田さんに教えてもらったそうだ。私もそのようにして、編みははじめだけヨシエさんに習ったものだよ。

(略)ポロトコタンでは、編みはじめから模様を入れる列までの赤い布と黒い布の段数と配置や編み終わりの処理の方法が人によって違って、そこを見るとだいたい誰が製作したかわかるよ。」(2024年6月の山崎シマ子への聞き取りにて)

「私がポロトで働き始めたときは、織田ステノフチ²⁶⁾がポンチセというところにいた。(略)織田さんから、ござ編みも教えてもらった。また、工芸のチセには、野本ヨシエさんもいた。姉のハナエさんもいたと思う。そのころは、近藤ノリ子さん、小林トシさん、松永たけさんなどがいた。(松永)八重ちゃんは、お母さんのたけさんと少し時期がかぶっていた。(略)私が学芸課にいた頃は、川上シン²⁷⁾さんに平取からポロトまで来てもらって、ござ編みやアットウシ織、サラニブ(編袋)を教わった。ポロトは、冬にお客さんが来ないから、職員の人たちに手仕事をやってもらっていた。シンさんは季節雇用だったから冬は平取に戻っていた。(略)八重ちゃんはシンさんからサラニブを教わっていた。

八重ちゃんは、ござは最初ヨシエさんから習っていた。少しござが編めるようになってから、織田さんに文様入りのござを教えてもらっていた。素材の取り方や処理も含めて習っていた。」(2024年7月の岡田路明への聞き取りにて)

「八重ちゃんはなんでもできたしやっていた。キナ²⁸⁾、着物も縫っていた。アツシ²⁹⁾もやっていた。八重ちゃんがアツシを織るときの樹皮は、虎杖浜の温泉に浸けていた。これは自分も手伝った。

(略)1980年代は、伝承課職員の着物や装身具は自分賄い。自分で揃えなければならなかった。自分は近藤ノリ子さんに作ってもらった。(略)工芸チセに詰めていた職員が複数名いたことは大きい。工芸を主に行う職員がいたことは大切なこと。踊りだけが伝承というわけではなく、高齢で踊れないとか理由がある人が文化伝承に携われるようにしたことは大きいよね。

(略)ポロトの工芸は、学芸課、工芸課、伝承課というように組織改編を行っているなかで、色んなフッチ³⁰⁾たちからの技術を後進が習得してそれを受け入れてきた。柔軟だった。

(略)ポロトは、教育的使命と人材育成という二輪があった。また、1970年の大阪万博へ、白老民族文化保存財団、白老民族芸能保存会、白老商業協同組合の大人数で参加したことで、文化伝承の組織化の素地もできたのでは。白老の強みだと思う。」(2024年7月の野本正博への聞き取りにて)

「わたしらは、八重ちゃんからキナ編み(ござ編み)を習ったんだ。八重ちゃんは、ずっと、アイヌだから自然素材使ってもものづくりしなければならなかったっていついた。(略)それまでそれぞれ刺繍サークルいついた人たちもいたけれど、八重ちゃんがサークル立ち上げるってなったとき、みんな集まったんだわ。

(略)わたしらがつくったものは、チキサニ(イオル事務所)で何回か展示したよ。わたしらののはござ多かったかな。ほかのサークルは着物とか手甲とかも展示していたよ。(略)チキサニは、それぞれのサークルがつくったものを展示する期間があるから。」(2023年7月の清水綾子への聞き取りにて)

(2) 資料調査の結果と考察

本稿では松永八重子が製作したござについて、編み途中となる資料番号 R5-01035も含め、現アイヌ博所蔵資料27点を調査した。令和5年度に購入したござは、旧アイヌ博退職後に製作されたものである。資料

館、旧アイヌ博在籍時には、3メートルを超えるござを複数製作している。これは伝承活動となる儀礼やイベント時に装飾するために使用する大型のござの需要があり、素材となるガマを十分に確保できていたこともうかがえる。退職後となる2002年以降に製作したござは、幅が50cm、長さが80cmで模様入りのござと小型になっている。これは初心者がある程度の製作時間で完成が可能となる大きさである。退職後はサークル「チタラペ」や白老アイヌ協会の工芸研修における指導を行ったことから、小型のござを教材として活用していたと考えられる。旧アイヌ博では工芸担当職員として手仕事を専門に行い、退職後は習得した技術をサークル活動にて、後進の指導を行った。

また、松永の製作技術に着目して分析を行った。

ござの製作技術に関する先行研究では、「1本おき編み」と「スダレ編み」の2種類があることが指摘され

ている³¹⁾(貝澤2005)。ただし貝澤の調査は平取町で製作されたござが対象で、白老地域のものには触れていない。

また、素材選択の特徴に関しては、北海道アイヌ、樺太アイヌは、無文のござの緯材としてガマ、オオカサスゲ、ヤラメスゲ、フトイ、サンカクイなど、経糸にはシナノキ、オオバボダイジュ、エゾイラクサなどの繊維を撚った糸を用いることが指摘されている(大坂2023:30)。

山崎、岡田からの聞き取りで、松永は、編みはじめは野本ヨシエ、模様は織田ステノより教わったとあった。この情報を踏まえ、ござの部位名称を以下4つの視点に分けて資料調査を実施した。なお、本稿におけるござの部位名称①、③、④は、『アイヌ文化再現マニュアル 編むーゴザー』に使われている語句を踏襲する(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2006)。

①編み始め	編み1段目から模様を入れる前の段までを指す。
②製作技法	1本おき編みかスダレ編みか。
③編み終わり	模様の編みおわり後に、無地の部分をはさみ、布を入れ始めている段から編み終わりまでの段数。
④経糸の処理	まるめたござをまとめるための紐となる経糸をどのように処理したか。糸撚りか編みかどうか。



写真10 ござ部位名称の視点
(国立アイヌ民族博物館蔵 MA62)

なお、今回は聞き取り調査でござの模様構成に関する言及が薄かったことから、ござに施された模様構成については除外する。模様構成については、現在調査を行っているため、今後まとめて発表を行うこととした。松永の製作したござの特徴は以下の通りである。

①編み始めは、黒3段、赤1段、黒2段を基本構成とし、その後は素編み3段または5段のあとに黒布の段がはいり特徴の資料が27点のうち18点にみられた。長さが200cm以下のもののなかには、編み始めを減らし黒

2段、赤1段、黒1段と製作する資料が4点確認できた。

②製作技法は、27点すべて貝澤が指摘する「一本おき編み」の技法である(図3)。模様の有無にかかわらず、技法に変化はみられない。

③編み終わりは、黒2段、赤1段、黒3段を基本構成とし、編みはじめと対になるように製作されている。

④経糸の処理は、カエカ³²⁾で紐の端になる部分が細くなるよう、徐々に糸を減らしていく手法がとられている。これは27点すべてこの処理で糸を始末していた。

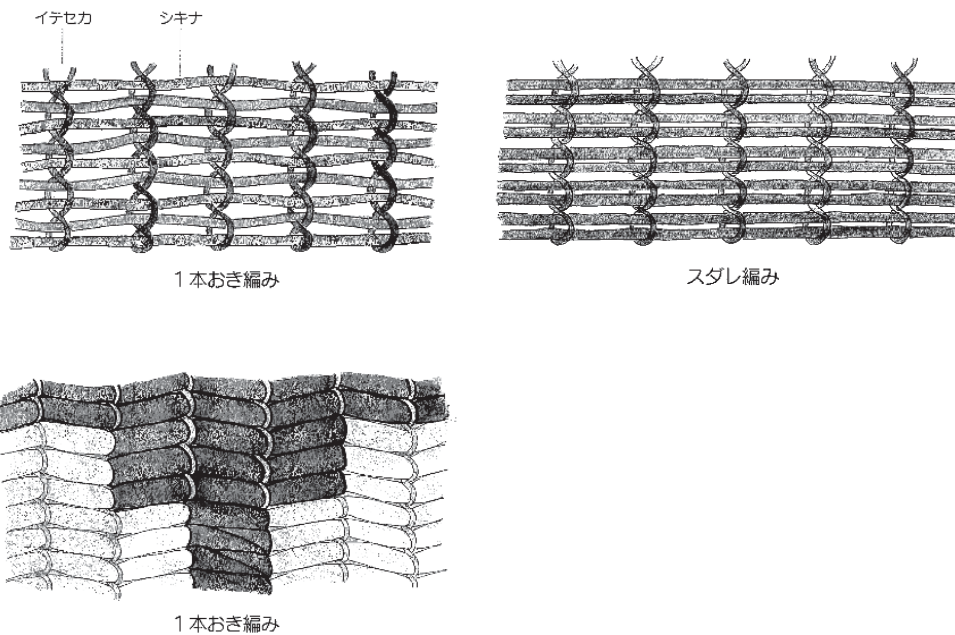


写真11 松永の製作したござ 編み始め部分拡大 資料番号 MA001
(国立アイヌ民族博物館蔵)

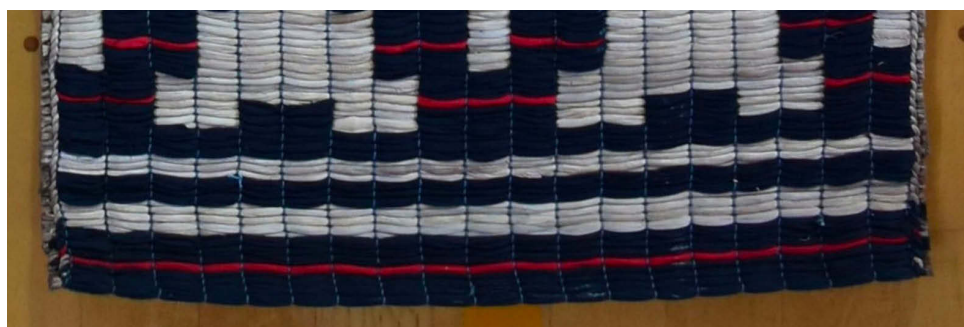


写真12 織田ステノが製作したござ 編み始め部分拡大 資料番号 MA97
昭和52(1977)年9月15日完成品。
(国立アイヌ民族博物館蔵)

松永の製作したござの緯材はすべてガマである。松永のござの調査をふまえ、織田ステノ製作の資料番号 MA97と比較してみると、編み始め、編み終わり、糸の処理が類似し、技法は一本おき編みである(写真12)。織田の他のござも模様の有無にかかわらず、変化は見られなかった。さらに松永のござの編み始めが野本ヨシエの影響があるとの情報を踏まえ、現アイヌ博所蔵が所蔵する野本が製作したござ35点の編み始めをみると、統一性がないことがわかった。松永の編み始めの構成と同じものは、野本が製作した模様入りござのうち1977～1979年に製作したござ5点³³⁾が該当した。松永が資料館に勤務しはじめたのは1978年のため、この頃に野本ヨシエ嬢に編み始めのやり方を教わったという山崎の聞き取りと一致する。そして全体的な製作技術は織田ステノのござとも一致する。

しかしここで静内出身の織田ステノが製作したござと、白老出身の野本ヨシエが1977年～1979年の製作したござの編みははじめが同じ点に着目したい。この両者間で技術の伝承があったのかどうか疑問が生じた。織田から野本へ技術伝承があった可能性を考え、再度旧アイヌ博の勤務記録にあたった。織田は1977年4月から1982年に勤務し、野本は1977年4月から1991年まで勤務し、勤務開始年月は同じであった。織田、野本の製作したござの編みははじめをみると、織田のござは一貫して、同じ構成で編みはじめられているのに対し、野本のござは編みはじめに統一性は見られなかった。このことから、織田、野本それぞれがござ編みの技術を習得し、資料館に勤務しはじめてござを製作したし、両者間での技術伝承はなかったと結論づける。

松永のござの考察を以下の通りまとめる。

松永の製作するござはガマを素材とし、編み始めは黒3段、赤1段、黒1段または2段を基本構成とし、この構成は野本ヨシエと類似している。さらに製作技法はござの模様の有無にかかわらず「一本おき編み」の技法を採用していた。編み終わりは、編み始めと対になるように製作され、編み終わった経糸の処理は、紐の端になる部分が細くなるよう、徐々に糸を減らしていく手法がとられた。これらの技法は、織田ステノの製作したござと一致する。

旧アイヌ博在籍時のござと退職後の2002年以降に製作されたござと比較したところ、編み始め、製作技法などに変化はみられなかった。このことから、松永は織田ステノ、野本ヨシエから指導を受けたことを退職後も忠実に守り、ござの製作を長年継続してきたと結

論付ける。

今後は次にあげる点を踏まえた調査を行いたい。1点目は1977年以前に勤務経験ある元職員が製作したござを調査し、本稿で取り上げなかった模様構成も含めた製作技術を明らかにすることである。2点目は、織田と松永のござの模様構成を比較し明らかにすることである。織田のござを調査するとともに、織田から指導を受けた人物らの製作したござもあわせて調査することで、織田の周囲の指導系統や製作技術が明らかとなる。3点目は、松永より指導を受けた人物らが製作したござを調査し、松永の工芸技術がどのように伝承されているかを調査し、比較することである。

これらの点を明らかにすることで、「白老地域のござの特徴」の情報が蓄積し、白老地域のアイヌ文化における工芸活動の全容がみえ、1975年から1984年の空白となる情報を埋めることができるであろう。

6. まとめ

本稿では松永八重子に焦点を当て、松永の関係者への聞き取り調査、資料調査の結果から、資料館、旧アイヌ博、退職後の活動を明らかにし、松永が製作したアイヌ関連資料の情報をまとめ、松永の製作した資料の特徴を明らかとする。

①松永の製作したルウンペは、近藤ノリ子が製作した衤と身ハツ口があるルウンペとはほぼ同じである。松永が勤務し始めた頃は、素材選択が木綿→化学繊維→木綿と変遷するなかで、化学繊維から木綿への過渡期であった(八幡2024:18-20)。さらに松永のルウンペに施されていた模様は今後検討する必要がある。聞き取りによって、松永が衣服製作を指導したことも明らかになったので、今後追加で調査を行う予定である。

②松永は、資料館、旧アイヌ博在職時にござ編み(模様無し/有り)、サラニア(編み袋)、エムシアッ(刀掛帯)などの編みを習得し、その技術は織田ステノ、野本ヨシエから指導を受けていることがわかった。退職後に製作したござも旧アイヌ博時に製作したものと変化がないことから、織田、野本の指導を忠実に守ったござ製作を退職後となる2002年以降も行っていた。本稿で模様構成について言及しなかったが、このことについて筆者は調査中であるため、今後の調査で模様構成に注目した内容をまとめたい。

聞き取り調査で明らかとなった松永のござの技術継

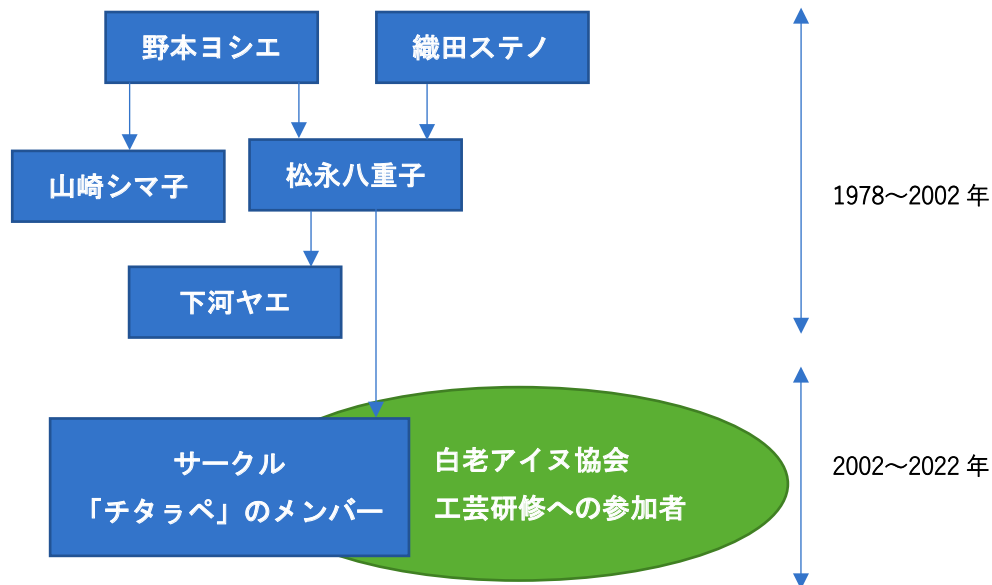


図4 松永のござの技術継承（1978～2022年）
聞き取り調査をもとに筆者作成

承は図4のとおりである。松永が資料館、旧アイヌ博で習得したござの編み方を白老町内で普及していたことがわかる。白老地域のルウンペは、資料館、旧アイヌ博で得た知識や経験を、元職員が退職後にそれぞれ指導者として後進を育成したことでひろがりを見せた（八幡2024：26）。ござについても松永の周囲で同様の事象があったことが考えられ、「博物館」というフィールドで習得した技術を町内に波及し、伝承活動を行う意義を再認識できた。

今後の松永に関する調査の課題は、以下のとおりである。

①岡田からの聞き取りでは、松永が川上シンより編袋の指導を受けたとあった。現アイヌ博の収蔵品で、川上シン製作の編袋がないため、今後現アイヌ博以外の収蔵資料を対象とする調査が必要である。

②資料館、旧アイヌ博を起点とし白老町に広がった工芸活動のなかで、本稿では1978年から2022年の松永の周辺に関する衣服、ござの製作について述べた。今後は、松永以前に勤務していた人物の来歴や製作した資料、松永と同時期に勤務していた人物ら、その人物らよりも後に勤務した人物らに関してもあわせて調査を行い、1975年～1984年の工芸活動の空白の情報を補うことが不可欠である。

白老民俗資料館設立時代から旧アイヌ博設立期における直接的な記録はほぼなかったため、本稿は聞き取り調査で得た情報に拠ることが多かった。今後の調査は、元職員らは高齢化に伴い、聞き取り調査の実施

が年を追うごとに難しくなっていることを考慮した活動が求められるであろう。個々人の功績から、資料館、旧アイヌ博、そしてそのフィールドを包括した「白老ポロトコタン」で行われた工芸について考察し、ひいては白老のアイヌ工芸の地域性を明らかにすることが、白老地域のみならず、他地域の物質文化の実態解明に役立つよう、今後も調査を行いたい。

7. さいごに

本稿では、聞き取り調査と資料調査から1978年から2002年に資料館、旧アイヌ博に勤務した松永八重子のルウンペとござの特徴についてまとめた。1960年以降の記録が現アイヌ博にはほぼないことと、元職員の「口伝え」が今後の調査に不可欠であることを今回の調査で改めて実感した。現状として白老民俗資料館、一般財団法人アイヌ民族博物館の工芸活動が元職員の「口伝え」頼みであることに筆者は危機感を抱き、早急に聞き取り調査と資料調査から職員一人一人の経歴や製作資料の情報をまとめることが不可欠であると感じた。

本稿を執筆するにあたり、松永八重子が資料館勤務以前にハンドメイドが好きだったことから、アイヌ女性の手仕事に興味関心を抱き、長期にわたり資料館、博物館に勤務し、さらに退職後もサークルを立ち上げ主宰し、成果品展を精力的に行っていたことがわかった。資料調査と聞き取り調査から、松永の製作意欲や文化伝承の熱意に間接的に触れることができたが、これら

の製作背景や想いなどを直接聞けなかったことが悔やまれる。そして文化伝承における口伝え頼みは、情報を覚えている人物が何らかの理由で不在となってしまうとき、簡単に情報が途切れてしまうことを実感した。口伝え頼みがいかに危ういかを認識させられたのである。

本稿では、松永の資料54点が現アイヌ博に収蔵されていたことが幸いし、資料調査や分析での情報のまとまりができた。さらに聞き取り調査から、松永が指導をおこなった職員の下河ヤエ、久保紀子などの人物名を明らかにすることができた。久保は既に他界して情

報が追えないため、今後は1980年代後半に勤務した下河ヤエを中心に追加調査を行う予定である。

1950年代以降の情報は、地元白老の住民でもその頃の記憶を持つ人物が高齢化などの理由から全容が把握しづらい。今回聞き取り調査で得た情報は、元職員たちのアイヌ観光とアイヌ文化伝承の両立をする苦勞についての言及もあった。資料館、博物館というフィールドを活用してモノ作りを行いつつ伝承活動を確立する工夫もみられた。白老という地域で、ポロトコタンにおける運営母体の組織名が変わっても、「アイヌ民族の歴史や文化を後世に残す」という個々人の想い

付表 松永八重子関連資料一覧

館蔵番号	所蔵先	資料番号	資料名	数量	サイズ (mm)	備考
1	アイヌ民族文化財団	11326	刀の下げ帯	1	-	※説明：製作者、エムシアツ：松永タケ氏、エムシブサ：松永八重子氏。
2	アイヌ民族文化財団	11327	刀掛帯（房）	1	-	※説明：製作者、松永八重子氏、熊野真氏、エムシアツ（房部分）1992年2月9日。
3	アイヌ民族文化財団	m0906	紐	1	-	若小牧美術愛好会 遠藤忠志氏様 松永八重子氏を描いたもの
4	アイヌ民族文化財団	MN019	ゴザ	1	L3845×W910	H6.2.27
5	アイヌ民族文化財団	MN027	ゴザ	1	L3860×W990	2005.6.13
6	アイヌ民族文化財団	MN063	ゴザ	1	L3840×L950	穴あり・損傷が激しいので使用不可
7	アイヌ民族文化財団	MN075	ゴザ	1	L3815×W1000	568.10.16
8	アイヌ民族文化財団	MA001	ゴザ	1	L4065×W1580	1997.5.30. 材料ガマ、ゴロチセ カムイノミ用 コタンノミにも使用
9	アイヌ民族文化財団	MA009	ゴザ	1	L480×W1060	松永八重子補修 「2号手セ 壁に使用していたもの2枚あり」
10	アイヌ民族文化財団	MA018	ゴザ	1	L1500×W770	H4.2.8.
11	アイヌ民族文化財団	MA028	ゴザ	1	L1150×W575	松永八重子
12	アイヌ民族文化財団	MA044	ゴザ	1	L1990×W730	資料裏に「563.9.3カムイノミタクルベ ゴロチセ用」と記載。
13	アイヌ民族文化財団	MA057	ゴザ	1	L3850×W1000	管理用Excelデータに「2006.7.26」と記載。
14	アイヌ民族文化財団	MA063	ゴザ	1	L2350×W1030	国立アイヌ民族博物館 基本展示室「私たちのくらし」壁面にて展示中。
15	アイヌ民族文化財団	MA072	ゴザ	1	W3800×W1010	管理用Excelデータに「1995.12.15」と記載。
16	アイヌ民族文化財団	MA083	ゴザ	1	W3800×W1000	管理用Excelデータに「H6.1.30」と記載。
17	アイヌ民族文化財団	MA102	ゴザ	1	L1820×W480	管理用Excelデータに「H7.6.27」と記載。
18	アイヌ民族文化財団	MA104	ゴザ	1	L1030×W645	管理用Excelデータに「細田ステキ松永八重子、H7.5展示していたのを下げ座から松永八重子氏へ上げる。」と記載。
19	アイヌ民族文化財団	74	ゴザ	1	L3820×W920	札幌事務所管理。素材：ガマ、木綿布。
20	令和5年度購入資料	R5-01001	衣服（木綿）	1	1350×1320	故・松永八重子氏が着用した木綿衣。本体、テープ部ミシン縫い。刺繍はチェウンステッチ。
21	令和5年度購入資料	R5-01002	衣服（木綿）	1	1385×1420	故・松永八重子氏が着用した木綿衣。本体、テープ部ミシン縫い。刺繍はチェウンステッチ。一部シミあり。
22	令和5年度購入資料	R5-01003	衣服（木綿）	1	1380×1300	故・松永八重子氏が着用した衣服（化繊）。本体、テープ部ミシン縫い。刺繍はチェウンステッチ。
23	令和5年度購入資料	R5-01004	半纏	1	775×1300	化学繊維製。本体、テープ部ミシン縫い。刺繍はチェウンステッチ。
24	令和5年度購入資料	R5-01005	刀掛帯	1	1470×660	房なし。シタ、レース糸（紺、白）使用。30本縞みから始まって36本縞みで完成している。
25	令和5年度購入資料	R5-01006	刀掛帯	1	1440×580	房なし。シタ、レース糸（紺、白）使用。30本縞みで完成している。
26	令和5年度購入資料	R5-01007	ガマ製バッグ	1	545×360	ガマ、たたみ糸使用。4cm縞のごをバック状にしたもの。持ち手もガマを編んだものが縫い付けられている。
27	令和5年度購入資料	R5-01008	ガマ製バッグ	1	560×370	ガマ、たたみ糸使用。4cm縞のごをバック状にしたもの。持ち手もガマを編んだものが縫い付けられている。
28	令和5年度購入資料	R5-01009	縞袋	1	L780×W250	麻糸、たたみ糸を使用。底面から縞み始めたもの。
29	令和5年度購入資料	R5-01010	縞袋	1	L540×W330	シタ製。持ち手の一部にセグがついている。
30	令和5年度購入資料	R5-01011	縞袋	1	L545×W250	サラニウ（松10）のなかにあつたもの。麻紐、たたみ糸使用。4.5cm縞で編まれたものを袋状にしたもの。
31	令和5年度購入資料	R5-01012	縞袋	1	L870×W280	麻紐、たたみ糸使用。3cm縞に編まれたものを使用している。
32	令和5年度購入資料	R5-01013	縞袋	1	L500×W240	シタ製。
33	令和5年度購入資料	R5-01014	縞袋	1	L550×W330	シタ、たたみ糸使用。3.5cm縞に編まれたものを使用。
34	令和5年度購入資料	R5-01015	縞袋入りゴザ	1	本体L765×W545、紐785	3.5cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒、赤）。一本おき縞み。
35	令和5年度購入資料	R5-01016	縞袋入りゴザ	1	本体L785×W540、紐590	3.5cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒、赤）。一本おき縞み。
36	令和5年度購入資料	R5-01017	縞袋入りゴザ	1	本体L1235×W533、紐830	3.5cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒）、ブロード（ピンク）。一本おき縞み。
37	令和5年度購入資料	R5-01018	ゴザ	1	本体L2000×W625、紐970	4cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒、赤）。
38	令和5年度購入資料	R5-01019	ゴザ	1	本体L1920×W780、紐825	4cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒、赤）。
39	令和5年度購入資料	R5-01020	縞袋入りゴザ	1	本体L1966×W700、紐580	4cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒）、ブロード（赤）。一本おき縞み。
40	令和5年度購入資料	R5-01021	縞袋入りゴザ	1	本体L1460×W670、紐1590	3.5cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒）、ブロード（赤）、トウィンロープ。一本おき縞み。紐は、途中でたたみ糸からトウィンロープをつなぎ、長さを足している。
41	令和5年度購入資料	R5-01022	縞袋入りゴザ	1	本体L1700×W850、紐1250	4cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿布（黒）、ブロード（赤）、トウィンロープ。一本おき縞み。紐は、途中でたたみ糸からトウィンロープをつなぎ、長さを足している。
42	令和5年度購入資料	R5-01023	縞袋入りゴザ	1	本体L1450×W775、紐1010	4cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿（黒、赤）。一本おき縞み。裏にマジックで松に○とマジック記載あり。
43	令和5年度購入資料	R5-01024	ゴザ	1	本体L1190×W780、紐1000	4cm縞。ガマ、たたみ糸、木綿（黒、赤）。模様裏に縞みの交差がくる縞み方をしている。裏にマジックで松に○とマジック記載あり。
44	令和5年度購入資料	R5-01025	イテセニ	1	L1391×W50×T13	木材。表面にマッキーペンで「松永4.5」、裏面に「松永4.5」と注記あり。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶしあり。縞み目が4.5cm縞のごぞや、サラニウ等の製作に利用されたもの。
45	令和5年度購入資料	R5-01026	イテセニ	1	L1500×W45×T14	木材。表面にマッキーペンで「松永4」。裏面に「サバ用17目」と注記あり。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶし。縞み目が4cm縞のごぞや、サラニウ、また男性の儀礼用冠等の製作に利用されたもの。
46	令和5年度購入資料	R5-01027	イテセニ	1	L1497×W45×T12	木材。表面にマッキーペンで「松永4.5」が左右にある。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶしあり。縞み目が4.5cm縞のごぞや、サラニウ等の製作に利用されたもの。
47	令和5年度購入資料	R5-01028	イテセニ	1	L1500×W45×T14	木材。表面にマッキーペンで左側に「松永3.5」、右側に「3.5イテセニ」の注記あり。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶしあり。縞み目が3.5cm縞のごぞや、サラニウ等の製作に利用されたもの。
48	令和5年度購入資料	R5-01029	イテセニ	1	L1300×W45×T14	木材。表面にマッキーペンで左側に「松3.5」、右側に「3.5松」の注記あり。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶしあり。縞み目が3.5cm縞のごぞや、サラニウ等の製作に利用されたもの。
49	令和5年度購入資料	R5-01030	イテセニ	1	L1495×W56×T13	木材。表面にマッキーペンで「タケ用」と、裏面左側に「3」、右側に「松永3」の注記あり。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶしあり。大型ごぞや、サラニウ等の製作に利用されたもの。タケは、松永八重子氏の母である松永タケ氏で、タケ氏が所有、使用した道具である。
50	令和5年度購入資料	R5-01031	イテセニ	1	L1500×W45×T12	木材。表面にマッキーペンで左側に「無」、「松永 無」の注記あり。目印に中央部にマッキーペン（黒）で塗りつぶしあり。ごぞや、サラニウ等の製作に利用されたもの。右側に割れあり。うらに記載はなし。
51	令和5年度購入資料	R5-01032	イテセニ	1	L12150×W47×T14	木材。加工途中のため、切込みなどはなし。ラワン材。
52	令和5年度購入資料	R5-01033	ゴザ縞み用の脚	1	(左) L655×W280、φ51 (右) L623×W320、φ56	左右ともに「松永用」と記載あり。くぎが打ち込まれている。紐で結束されている。
53	令和5年度購入資料	R5-01034	ゴザ縞み用の脚	1	(左) L582×W340、φ66 (右) L600×W255、φ54	素材はエンジンジュと思われる。カビ多数。紐で結束されている。
54	令和5年度購入資料	R5-01035	イテセニ 縞みかけ	1	L1220×H610×D615	縞みかけ一式。脚一式、35個。イテセニ、ひも付き組1セット、3.5cm縞ごぞ縞みかけ570mm。縞みかけのごは一本おき縞み。

とそれを取り巻くさまざまな人たちが、そこに繋がった組織の活動を知る機会となり、白老地域はもとより、織田ステノのように他地域から白老に来て生活文化を次世代につなげた諸先輩たちの努力や熱意を実感できた調査となった。これらの事柄を筆者の記憶や記録だけで留めておくことは忍びないため、今後論文や研究ノートなどにまとめ、公開できるようにしていきたい。これらの情報がモノ作りを行う人たちだけでなく、アイヌ民族として文化伝承を行う人たちが、それらを取り巻く人たちに寄与できるよう、今後も継続して調査を行ってきたい。

なお本稿で調査した資料54点のうち、公益財団法人アイヌ民族文化財団札幌事務局資料1点を除く53点は、2025年2月に国立アイヌ民族博物館収蔵資料データベースに情報を追加した。

謝辞

本稿を作成するにあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。ポロトコタンの元職員のみなさま、親類のみなさまには、聞き取り調査にて多くのことを学ばせていただきました。厚く御礼申し上げます。

北海道博物館の大坂拓氏には、ご助言と激励をいただきました。

英訳に関しては、国立民族学博物館のマーク・ウィンチェスター氏にご協力いただきました。

二名の匿名査読者より極めて有益なご指摘を頂いたことで、記述を見直すことができ、さらに収蔵資料データベースの公開に繋げることができましたことを厚くお礼申し上げます。

最後に、本稿を作成するにあたり、国立アイヌ民族博物館の鈴木建治氏、谷地田未緒氏より、多大なご助言、ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

ソンノソンノ イヤイライケレ。

注

- 1) 1965年に白老市街にあったアイヌ観光の機能を移転し、「ポロトコタン」として営業を開始した。1967年、ポロトコタン敷地内に白老民俗資料館が開館した(白老町1975)。収蔵資料点数の増加に伴い、施設が狭あいとなったことから、新しく博物館を建設することとなった。1984年、白老民俗資料館の建物とつなげたアイヌ民族博物館が開館した。ポロトコタンには、その周辺にあった商業施設「ミントラ」も含まれることに留意したい。ポロトコタンは2018年3月末日をもって閉館し、一般財団法人アイヌ民族博物館と公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が合併し、名称を「公益財団法人アイヌ民族文化財団」と改め、4月1日から事業開始した。2019年4月に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」(アイヌ施策推進

- 法)が公布され、5月24日に施行となった。アイヌ施策推進法に基づき、5月24日、国土交通大臣及び文部科学大臣から民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)の管理等を行う法人として指定された。財団は、2020年7月11日までの設立準備期間を経て、2020年7月12日に民族共生象徴空間の開園と同日に、国立アイヌ民族博物館が開館した。運営は公益財団法人アイヌ民族文化財団が行っている。詳細は、https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/details/post_1.htmlを参照いただきたい。
- 2) 元職員の成果品は、資料台帳や資料カードが存在しない資料が一部存在する。
 - 3) 「白老町史」によると、白老では古くからアイヌ民族居住の地として知られ、明治以降、北海道を訪れる人々を受け入れる「アイヌコタン」が現白老町大町を中心として形成された。1950年から1960年にかけて北海道観光ブームとともに、年間数十万人が同コタンを訪れるようになり、種々の弊害が生じたため、同コタンを1965年5月にポロト湖畔に移設し、「ポロトコタン」と称し営業を開始した。その運営にあたったのが、1965年3月に設立した白老観光コンサルタント株式会社である(白老町1975:709-710)。『二十年の歩み』によると、白老観光コンサルタント株式会社は、復元家屋チセとその内部における民族資料の紹介と古式舞踊の公開を行ったという。その後、ポロトコタンの財団法人化構想とともに1976年8月に発展的に解散し、これまでの事業は財団法人白老民族文化伝承保存財団の設立とともに、同財団に引き継がれた(財団法人アイヌ民族博物館1996:28-29)。
 - 4) 財団法人白老民族文化伝承保存財団は、注3に示した経緯にて設立された団体である。設立時の「寄附行為」に定める目的は、「白老地方のアイヌの文化的所産の伝承保存と公開に必要な事業を行い、もって北方文化の発展に寄与すること」であった。白老民族文化伝承保存財団は、復元家屋チセの建設とその維持管理や白老町の委託を受けて、白老町立白老民族資料館の管理運営などを行った(財団法人アイヌ民族博物館1996:29-30)。資料館は収蔵品の増大により狭あいとなったため、大幅の増築が検討され、1984年新館が完成し「アイヌ民族博物館」に建物名が変更となり、引き続き同財団が管理・運営を行った。1990年に財団の名称を「財団法人アイヌ民族博物館」と改め、2013年には公益財団法人改革に伴う法改正により「一般財団法人アイヌ民族博物館」と名称を変更した(一般財団法人アイヌ民族博物館2014:12-21)。
 - 5) 『二十年の歩み』に、松永のムックリ演奏が上手であり、それを指導したのは、浜弥一郎であることの一文があったが、工芸と関連がないため今回は割愛する(財団法人アイヌ民族博物館1996:20)。
 - 6) 松永だけは白老町出身で、白老地域のアイヌ文化、とくに衣食住に関する知識や経験がある人物である。松永だけは1977年から1980年まで資料館に勤務した。現アイヌ博の収蔵資料には、植物利用などを語った音声資料がある。
 - 7) 資料館、旧アイヌ博では、臨時職員(おおよそ3か月～半年の契約職員)、定期職員(単年度の契約職員)、正職員という3つの雇用形態が存在した。
 - 8) 白老民族芸能保存会は、ポロトコタン運営母体となる白老観光コンサルタント株式会社時代の1970年6月1日に発足した。発足した契機は、同年7月に大阪府吹田市で開催された日本万国博覧会「日本の祭り」における公演のためである。その後、観光コンサルタント株式会社は発展的に解散し、財団法人白老民族文化伝承保存財団の設立以降、財団職員を中心とした組織をもって、同保存会と実質的に一体となって古式舞踊の伝承・保存、並びに公演を実施していた(財団法人アイヌ民族博物館1996:53)。
 - 9) 野本ヨシエ(1922-2020)、白老町出身。1977年から1991年まで資料館、旧アイヌ博に勤務。2007年3月に白老町指定無形民俗文化財伝統文化継承者として認定を受けている。継承区分は、「工芸:ゴザ作成を中心としたアイヌの伝統的手工芸」と「芸能:白老地方のアイヌ古式舞踊等の伝統芸能」である。参考資料は下記の通り。
・白老町webサイト「白老町の文化財一覧」<https://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/docs/page2013012200618.html#:~:text=%E7%94%9F%E6%B6%AF%E5%AD%A6%E7%BF%92%E8%AA%B2%20%E6%96%87%E5%8C%96> (2024年9月30日閲覧)。
 - 10) 織田ステノ(1901?-1993)、北海道静内地方出身。戸籍名ステ。自称はステノ。大正期より、静内村の農業に従事した。1970年以降は、白老町のアイヌ民族博物館や静内町教育委員会などの業務に従事・協力した。そのため、アイヌ語や儀礼、口承文芸、生活文化などについて後進を指導し研究者に協力した人物として知られている(奥田2008:10)。

- 11) 工藤栄子は、1987年から1997年に勤務した元職員である。
- 12) 資料館におけるチセは、白老地域で記録された茅葺きの伝統的家屋である。
- 13) 白老観光協会が推薦団体となり、その理由としては「長年、アイヌ民族の文化の伝承・保存に力を注がれ、イヨマンテリムセやビリカの唄、ムックリの演奏など伝統古式舞踊の実演を行うとともにアットゥシ織の製作と指導にあたられてきた。また、アイヌ民族の伝統文化を国内外に紹介するとともに観光客誘致に努めるなど、地域の観光振興を通じ、北海道の観光の発展に寄与した功績はまことに大きい。」となる。なお、北海道観光連盟は、2008年に北海道観光振興機構へ名称を変更した。
- 14) 財団法人アイヌ民族博物館で保管されていた記録を参考とした。
- 15) アイヌ語で「ごぞ」を意味する(萱野1996:309)。
- 16) 現・公益財団法人アイヌ民族文化財団。1997年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(法律第52号)(アイヌ文化振興法)が、5月14日に公布され、7月1日に施行された。同日、北海道札幌市内に事務所を、9月13日には東京都内にアイヌ文化交流センターを開設し事業を開始した。2013年公益法人制度改革に伴い公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構として移行登記を行った。2018年一般財団法人アイヌ民族博物館と公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が合併し、名称を「公益財団法人アイヌ民族文化財団」と改めた(公益財団法人アイヌ民族文化財団2018)。
- 17) 仙台藩元陣屋資料館の平野学芸員によると、白老町指定無形民俗文化財伝統文化継承者は、2007年度から認定を始めたという。白老町教育委員会からの諮問を受けた委員で構成された白老町文化財等運営審議会が「知識・技能に習熟し今後も後継者の育成に携わる可能性がある」「技量の保持が広く認められている」などの基準で候補者を選考する。これまで認定された分野はアイヌ文化、木彫り、鍛造などで、継承区分は「工芸：ゴザ編みや縫製や刺繍など伝統的技術の伝承」というように、詳細に設定されている。これまでの伝統文化継承者一覧については、「白老町の文化財一覧」(<https://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/docs/page2013012200618.html>)を参考にしていきたい。
- 18) 国立アイヌ民族博物館は、公益財団法人アイヌ民族文化財団が管理運営を行っている。当該館は、民族共生象徴空間の一組織である。
- 19) 山崎らへの聞き取り調査によると、旧アイヌ博では、長期間勤務した職員に対し、在職期間中に製作したものを退職時に贈る慣わしがあった。
- 20) 下河やエは、1987年から2003年まで旧アイヌ博に勤務した。2013年に白老町指定無形民俗文化財伝統文化継承者として認定を受けている。継承区分は、「工芸：縫製や刺繍など伝統的服飾技術の伝承」、「芸能：踊りや歌などの伝統的芸能の伝承」である。
- 21) 久保紀子は、1991年から2010年まで旧アイヌ博に勤務していた。伝承課所属のため、古式舞踊紹介が主な業務であったが、職員が着用するルウンベ製作やミュージアムショップに販売する商品の開発や製作を精力的に行っていた人物である。
- 22) 近藤ノリ子(1924-2017)は、1979年から1987年まで資料館、旧アイヌ博に勤務していた。2007年3月に白老町指定無形民俗文化財伝統文化継承者として認定を受けている。継承区分は、「工芸：衣服作成を中心としたアイヌの伝統的手工芸」である。
- 23) 『日本民俗大辞典 上』に切伏の記載がある。「きりふせ 切伏 アイヌの衣服に関する技法の一つ。アププリケの一種。布を細いテープ状に切ったものを、衣服において文様を作る。テープ状に切った布の縁は、かがって衣服に縫いつけ、この上に刺繍を施す」とある(笹倉1999:510)。
- 24) 本稿でさす木綿は、ワタの種子からとれる天然繊維のことをいう。化学繊維はポリエステル系合成繊維、セルロース系再生繊維であるレーヨンなどを含めた人造繊維のことを示す。
- 25) 文化庁デジタルライブラリーには、アイヌ古式舞踊出演者の氏名が公開されており、松永のほかには山丸和幸、山丸悦子、新井田幹夫、山丸郁夫、河岸麗子、野本テツ子、久保紀子ほか8名の氏名がある。
・文化庁デジタルライブラリー「公演名：第16回特別企画公演」
https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/plays/view_detail?division=plays&class=special_kikaku&type=series&trace=detail&did=1400017 (2024年9月30日閲覧)
- 26) アイヌ語で「蠟」のことをいう(萱野1996:390)。

- 27) 川上シン蠟(1915-1990)。札幌生まれ。生後まもなく沙流郡平取町字荷負に移り、当地で結婚、生涯を過ごした。ヤイサマの歌い手として著名で、また儀式についての詳しい知識を持つ伝承者として知られた。有形、無形を問わず、アイヌ文化に関する知識は多岐にわたる。1978～1979年に旧アイヌ博のアイヌ文化保存事業に協力した。このころ旧アイヌ博で学芸課長だった岡田路明が聞き取り調査を行った(財団法人アイヌ民族博物館1995:6)。
- 28) ごぞのこと。
- 29) アツシ(または厚司)はアットゥシ織のこと。
- 30) アイヌ語で「お婆さん」のことをいう。沙流方言ではフチ、白老方言ではフッチと発音される(白老楽しく・やさしいアイヌ語教室2012:143)。野本は白老出身のため、アイヌ語は白老方言を使用している。
- 31) 貝澤はその他に和人の「ムシロ編み」の技法を取り入れたものについて言及しているが、本稿では取り扱わない。
- 32) アイヌ語で「糸撚り(をする)」こと(萱野1996:191)。聞き取り調査では「カエカして紐を作る」というように、「糸撚り」として言葉が使われている。
- 33) 国立アイヌ民族博物館の収蔵番号、MA16、MA54、MA35、MA91、MA3の計5枚。

参考文献

大坂拓

2023「千島アイヌのゴザに関する基礎的検討―市立函館博物館所蔵資料の位置づけについて―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第8号』pp21-34、札幌：北海道博物館。奥田統己

2008「織田ステ」『日本女性史大辞典』p10、東京：吉川弘文館。貝澤美和子

2005『イテセ(ゴザ編み)―シキナ活用の調査研究―』平取町：貝澤美和子。

萱野茂

1996『萱野茂のアイヌ語辞典』、東京都：三省堂。

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

2018『公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構活動史20年のあゆみ』p44、札幌：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

2000『財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構収蔵品目録1 1997.3-2000.3』p67、p71、札幌：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

2006『アイヌ生活再現マニュアル 編むーゴザー』札幌：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

財団法人アイヌ民族博物館

1995『アイヌ民族博物館伝承記録2 川上シンの伝承』p6、白老町：財団法人アイヌ民族博物館。

1996『財団法人設立20周年記念誌 二十年の歩み』白老：財団法人アイヌ民族博物館。

財団法人白老民族文化伝承保存財団

1987『アイヌ文化の基礎知識』p78、白老：財団法人白老民族文化伝承保存財団(1993年増補・改訂、2018年の増補・改訂では児島恭子が監修)。

笹倉いる美

1999「切伏」『日本民俗大辞典 上』p510、東京：吉川弘文館。

白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室

2012『アイヌ語 白老方言辞典』p143、白老町(北海道)：白老楽しく・やさしいアイヌ語教室。

白老町

1975『白老町史』白老町(北海道)：白老町役場。

白老町 web サイト

「白老町の文化財一覧」
<https://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/docs/page2013012200618.html#:~:text=%E7%94%9F%E6%B6%AF%E5%AD%A6%E7%BF%92%E8%AA%B2%20>

%E6%96%87%E5%8C%96 (2024年9月30日閲覧)。
滝沢ヒロ子 1999『新しい和裁全書』p71、東京都：株式会社永岡書店。
中谷哲二 1991「アイヌ衣服解説図」『アイヌのきもの』(ひとものこ
ころ：第3期第5巻) p 172、天理：天理教道友社。
八幡巴絵 2024「白老地域に伝わるルウンベの伝承とその変遷につい
て」『国立アイヌ民族博物館 研究紀要 第2号 2023』p 18、白老
町：国立アイヌ民族博物館。